

## 第三者意見



ヴッパータール研究所  
持続可能な生産・消費部門  
研究ユニット「イノベーションラボ」  
www.wupperinst.org  
共同リーダー

フィル・ユストゥス・  
フォン・ゲイブラー氏

### サステナビリティ報告に対する投資家の関心の高まり

企業、投資家およびその他のステークホルダーは、「サステナビリティは社会にとって望ましい成果であり、経済的に長期にわたって価値をもたらす強力な枠組みである」という認識を強めつつあります。例えば過去10年間において、責任ある投資に対する関心は高まっていますが、この傾向は、世界の資産がESG（環境、社会、ガバナンス）の基準に従って管理されるようになってきていること、またESG関連の決議に対する株主の支持が高まっていることと一致します。その結果、投資家およびその他のステークホルダーの間では、グローバル企業のサステナビリティ報告に対する関心が高まっています。

キャノンはこうした流れに対応して、より統合された報告を行う方向へと向かいつつあります。そうすることによって、財務情報およびその他の価値関連情報の点から、業績についてより一貫性のある説明を行えるようになります。これに伴う変化は本レポートの副題や編集方針（→P1）に表れているだけではありません。昨年版と比較して、2019年のレポートには2つの重要な変化が認められます。1つ目はキャノンの事業戦略に関する情報が増えていること、2つ目はESGファクターと事業戦略の相関性が強まっていることです。本第三者意見書では、この2つの主要な変更点について述べるとともに、なぜこれらの情報が責任ある投資家のみならず、利害関係のあるすべてのステークホルダーに関連のあるものでなければならないのかについて、説明したいと思います。

### 事業戦略に関する情報の増加

2019年のレポートでは、財務面と事業戦略により重点が置かれています。最も顕著な例は「グローバル優良企業グループ構想フェーズV」の進捗状況と事業ポートフォリオの転換について詳細に述べたCEOメッセージ（→P4～5）です。主要な財務指標の概観を示し

た財務ハイライト（→P13）や各ビジネスユニットの戦略に関するセクション（→P19～22）なども同様です。こうした変化は大いに賛成できます。事業戦略や事業ポートフォリオの転換に関する情報があることで、読者はキャノンのコアビジネスと具体的な意思決定の背景について、より深く理解することができるからです。その一方で、事業戦略に関する情報は、過去や近い将来に焦点が当てられていました。今後のレポートでは、経済、社会、環境といったテーマについての中長期的な目標の詳細が提示されることを期待します。2019年のレポートは、昨年版よりも報告内容が凝縮され、全体のボリュームが減っていますが、今後のレポートでは、詳細な情報を別途提供することで内容が一層強化されると思います。

### より強まった情報の相関性

財務、経済、社会、環境といった側面をコアビジネスに統合し関連づける企業ほど、イノベティブで競争力が高く、新たな事業機会を捉えやすい傾向にあります。2019年のレポートでは、そうした関連性がより強く打ち出されており、その点は高く評価できます。「キャノンの価値創造プロセス」（→P15～16）や「SDGsとの関わり」（→P17～18）で示された図はその好例です。ただし優先順位をより明確にし、環境セクションのマテリアリティマトリックス（→P62）のように、重要なテーマに選んだ根拠を示す分かりやすい図があれば、なおよかったと思います。すべての重要なテーマが等しく重要だというわけではないからです。価値創造とサステナビリティの目標（気候保護やサーキュラーエコノミーなど）に貢献するイノベーションの力をさらに向上させるための研究開発活動に対する戦略とマネジメントアプローチに関する情報も、もっと必要です。

私はキャノンのサステナビリティレポートが進化するプロセスに関与できることを大変うれしく思っています。喜ばしいことに、今年の討議にはキャノンのIR部門が初めて参加し、昨年以上に双方向の討議となりました。キャノンとのエンゲージメントおよび2019年のレポートのドラフトに基づき、今年もまたキャノンおよびレポート制作チームはサステナビリティレポートの品質と信頼性を著しく向上させ、投資家およびその他のステークホルダーに貢献したと私は考えます。そして、引き続きキャノンが透明性を向上させ、サステナビリティに寄与していくことを期待します。

第三者意見

フィル・ユストゥス・フォン・ゲイブラー氏について

フィル・ユストゥス・フォン・ゲイブラー氏は、優れた国際的サステナビリティ調査組織であるヴッパータール研究所に所属し、持続可能な生産・消費部門の研究ユニット「イノベーションラボ」の共同リーダーを務めています。サステナビリティ評価とサステナビリティイノベーションの分野での20年以上にわたる経験に基づき、サステナビリティ基準、バリューチェーンにおけるサステナビリティイノベーション、ステークホルダーエンゲージメント、企業とリビングラボでのオープンイノベーションに焦点を当てた研究を行っています。著書は数冊、執筆した科学的な出版物は100以上に上ります。

第三者意見書のプロセス

はじめに

キャノンは、ステークホルダーの皆さまに向けてサステナビリティレポートを長年にわたって発行し続け、報告のアプローチやステークホルダーとの関係を向上させてきました。2003年からは、外部のコメンテーターにサステナビリティレポートの評価ならびに第三者意見の提供をお願いしています。このプロセスは、信頼性の高い第三者から有意義なフィードバックを提供していただくことによって、キャノンが国際水準の活動ができるようになることをめざしています。

2008年よりヴッパータール研究所に所属するフィル・ユストゥス・フォン・ゲイブラー氏にコメンテーターを担当していただき、報告書を作成するプロセスにおいて、テレビ会議や意見書などを通して、アドバイスをいただいています。情報開示や企業パフォーマンス、ステークホルダーとの関係について討議する本ダイアログは、キャノンのステークホルダーエンゲージメントの基盤となっています。

コメンテーター意見の基準

キャノンはサステナビリティレポートの作成にあたって、長年グローバル・レポートング・イニシアティブ(GRI)のガイドラインを用いてきました。2018年版からは、2016年発行の「GRIスタンダード」に準拠しており、この第三者意見プロセスも以下の4つの「報告書内容の確定に関する報告原則」\*に従っています。

\*より詳しい説明とガイダンスは、以下のサイトから入手できます。  
<https://www.globalreporting.org/standards/gri-standards-translations/gri-standards-japanese-translations-download-center/gri-101-foundation-japanese-translation/>

- **重要性**：レポートは、キャノンにとって重要な経済的、環境的、社会的な課題を反映しているか
- **ステークホルダーの包含性**：レポートは、キャノンがステークホルダーの期待、関心にどのように応えているかを説明しているか
- **持続可能性の状況**：レポートは、広範なサステナビリティ課題・影響から見たキャノンのパフォーマンスを説明しているか
- **網羅性**：レポートは、キャノンのサステナビリティ面への影響を反映し、読者が同社のパフォーマンスを評価するのに十分な内容を網羅しているか

フォン・ゲイブラー氏はこれらの原則に従い、キャノンのレポートが彼らの期待にどの程度応えているかを、以下の点から評価しました。

- 「キャノンサステナビリティレポート2019」に掲載されている項目の妥当性
- レポートにある個々の掲載内容の質
- レポート全体の質、バランス、関連性

またキャノンは、長期的な視点に立った思考とマネジメントを促すために、財務・非財務情報を組み込むことを求める統合報告の枠組みに沿った報告書の作成に取り組み始めました。

サンクロフト・インターナショナルとそのチーフ・エグゼクティブであるジュディ・クチェウスキ氏がファシリテーターを務めています。クチェウスキ氏は、コメンテーターへの委託条件の確認やキャノンとコメンテーターとの間のコミュニケーションの仲介、第三者意見のレポートでの記載方法などの点で、キャノンに助言や支援を提供しています。クチェウスキ氏および外部のコメンテーターは、見識ある独立したサステナビリティの専門家としてキャノンの活動に強い関心を持ち、レポートの透明性、説明責任向上への支援を行うものであり、レポートに掲載された内容の「保証」を行う立場にはない点をご了承ください。

コメンテーターとの討議内容

キャノンとフォン・ゲイブラー氏はテレビ会議や書面を通して、レポートへの期待や主な関心分野、レポートに対する印象などについて討議しました。

主な議題は、以下の通りです。キャノン側の討議参加者の回答や見解もあわせて示しています。

議題	第三者意見	キャノンの見解
長期的な価値創造へのサステナビリティの統合	統合報告をめざすことにより、価値創造に対するキャノンの考え方の強化が促進される。財務面、経済面、社会面、環境面で成果を生むためのキャノンの意思決定についてより詳しく提示すれば、一層強化される。価値創造プロセスについてキャノンが議論を行っていることは前向きな動きである。引き続き「グローバル優良企業グループ構想」およびその他の事業戦略について言及するとともに、サステナビリティとそれに関連する目標をめぐる投資家とのエンゲージメントを強化することにより、この方向性は一層強化されるだろう。	キャノンはこのダイアログを含め、ステークホルダーの声に耳を傾け、ニーズに合致した情報開示に取り組んでいる。統合報告の枠組みに沿った報告書の作成についても、アンケート調査を通じてステークホルダーの関心度を確認したほか、社内検討を重ね、「キャノンの価値創造プロセス」「キャノンの価値創造の歩み」など、新たな情報を開示した。
レポートの枠組みとなるマテリアリティテーマの検証と改善	マテリアリティの説明については有益な改善がなされている。重要課題のすべてが等しく重要なわけではない。内容を改善し、優先順位を決め、自らの事業活動と関連づけることにより、重要なテーマの意義を向上させることができる。統合報告をめざすには、マテリアリティと事業との関連性がより明確でなければならない。	マテリアリティは、これまでキャノンが取り組んできた活動のほか、中長期経営計画など今後の事業の方向性や社会状況など、さまざまな要素を考慮し、毎年レビューを実施している。その結果を、「マテリアリティ(重要課題)の特定と再確認」(→P43)に記載した。また、マテリアリティと事業活動の関連性を価値創造の観点から整理し直し、「キャノンの価値創造プロセス」図にまとめた。
持続可能な開発目標(SDGs)との関連性	サステナビリティへのグローバルな対応を示すことで、引き続きSDGsへの貢献を強調している。政府、市民社会、企業と協働し、短期から中長期にわたってSDGsの達成を支援するというキャノンの役割について、引き続きステークホルダーの意見に耳を傾けるべきである。営利組織がSDGsの達成において果たす役割を理解する上で答えは1つとは限らないが、自社の考え方を早い段階からステークホルダーと共有していく必要がある。	キャノンは、自社の活動が社会や地球環境に対して及ぼす影響とSDGsとの関連度合いを、自社の活動の変化にあわせ、毎年レビューを実施している。例えば、技術開発分野において、最先端技術を有する教育・研究機関と共同プロジェクトを実施しているほか、他企業と連携した共同開発なども展開していることから、SDGs17を関連性が最も高いカテゴリに位置づけた。また、キャノンとの関連性が強いSDGsアイコンを一目で確認できるようページデザインを刷新したほか、マテリアリティに関連するSDGsや、ステークホルダーがキャノンに貢献を期待するSDGsについての紹介を行っている。
マネジメントアプローチに関する記述内容の深さと詳しさ	キャノンのマネジメントアプローチについて述べているセクションは、個々の具体的な分野に関連するリスクについての議論を記述することにより強化される。マネジメントアプローチに関連するすべてのセクションにおいて、経済面、社会面、環境面における目標、具体的なリソースと責任、業績を評価する手法についてのより詳細な説明がなされるべきである。	昨年までは、「環境」に関する「リスクと機会」のみの言及にとどまっていたが、今年はすべてのマテリアリティについてキャノンの考えを紹介した。今回のご意見を踏まえ、さらなる改善を図る。

加えて、キャノンと統合報告の関連性について、また統合された思考、マネジメントおよび業績の原則を価値創造への長期的視点とともにどのように掲げていくかについて、幅広い議論がなされました。

フォン・ゲイブラー氏の意見全文は、「第三者意見書」(→P126)に掲載しています。

サンクロフト・インターナショナルについて

サンクロフト・インターナショナルは、ジュディ・クチェウスキ氏がチーフ・エグゼクティブを務める、環境および社会的パフォーマンス改善のための世界最大のサステナビリティコンサルタント会社です。サンクロフト・インターナショナルは、サステナビリティ戦略、リソースマネジメント、倫理的貿易、人権、サステナビリティレポート、およびステークホルダーエンゲージメントなどについて助言しています。またクチェウスキ氏は、サステナビリティレポートに関する国際イニシアティブのGRIが設立した独立基準設定機関、グローバル・サステナビリティ基準審議会(GSSB)の議長も務めています。